

## あけぼの会奨励賞

「お母さんを乳がんで亡くして」

埜口 麻穂 (のぐち・まほ)

40歳／学生／東京都

「お母さん、ガンなの。」実家から少し離れたところで、一人暮らしをしていた私の部屋に、母から久し振りに電話があったのは、'98年9月のことだった。その時、私は30才、OL。小さい頃から母の厳し過ぎるしつけや叱り方に息苦しさを感じ、その3年前に、家を飛び出していた。

「ハハハ。ママは我が家のガンだからねえ。」間髪いれずに、私はついそう答えてしまった。私たち家族は、病気や病院と全く縁がないのが自慢だったし、寂しがりやの母が、娘の気を引こうとして、また冗談を言ってる、そう思ったのだ。しかし、それは直後の姉からの電話で「大失言」だったことが判り、青ざめた。母の癌は本当で、しかも乳癌、ステージVの末期だったのだ。

その「告知」からさか上ること3ヶ月前、母は、友人に「ショルダーバッグが肩に重く感じる。」と漏らしていたことを少し後になってから知った。今から思えば、その時既にガンが首のリンパ節に転移していたのかもしれない。我慢強いことが美德と育ち、又自分が万が一入院でもしたら、家事や家計のことが余りにも心配で、という理由から、検診を受けたことがなかったのだ。

母は、二度、ガン摘出の大手術をした。既に末期であったので、躊躇することなく乳房を除去した。抗ガン剤の副作用で髪は抜け落ち、放射線治療のせいで、肩がやけどを負ったように痛々しかった。母は、最後まで、私たち家族に弱みも涙も見せなかったが、本当は、とてもとても辛かったろう……。病室で、夜一人涙を流したに違いない。

そして、'99年8月末、母の最後の我がまを聞き、家族4人でドイツ旅行に行った。既に黄疸症状が出始め、医師である父が、飛行機の中でも点滴をし、常に血圧や脈などを診るという大変な状態であったが、結果的に、父、姉、私、そして何より母にとっても最も大きな心の宝ものになった。

帰国して2週間後、担当医から、それなりの覚悟を、と告げられたが、それでもまだ現実を信じたくなかった。亡くなる2日前、意識が朦朧とする中での母の言葉一つ一つが、初めて優しく温かく感じられた。そして、9月21日、最後に悔しさいっぱいを目を大きく見開き、ゆっくり目を閉じた。59才と5ヶ月だった。なぜ、こんな事になってしまったの？あの時、母の小さな異変に気づいていれば！もっと前から乳癌について勉強していれば！とあとからあとから後悔が吹き出してきた。